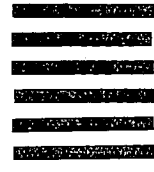


ヘル、一本アマレバ本卦ノ初爻ヘツク、二本アマレバ二爻ノ變ト知ルベシ、則チ左ノ圖ニ委シ、

上五四三二初



下ヲ初爻ト云
上ヲ上爻ト云

總ジテ一陰爻ハ一陽爻ニ變ジ、一陽爻ハ一陰爻ニ變ズルナリ、初ヨリ上爻ニ通ジテ皆同ジ、
右本卦變卦ヲ對照シテ判斷スベシ、猶口傳アリ、

〔三易由來記〕^上或人問ふ、四十有九策、十有八變の筮法は、古來よりの法にて、人により聊の異儀こそ有れ、總て偽法なりと、捨たる人は有ること無し、然るを前に、此は絶て筮し得まじき筮法なりと云へるは、何等の説有りて言へる事ぞ、答ふ、其謂ゆる古法は、眞の古法に非ず、姬昌が新法なること、四十九策を用ふるにて、更に論ひ無き事なり、歸藏用四十五策、周易用四十九策と有にて知ルべし、斯て其古說中に、以象三などの字を攙入し、再扨而後卦と云ふは、重卦法を示せる語なるを、左右兩策を撰へし奇を指間に狹める後に、挂る義に翻案して掛に作り、一爻三變のいと勞煩しき擬筮法を作り、且下文に十有八變而成卦ちふ偽文をさへに攙入せり、漢儒以來の註釋どもに普れく出て、互に少かの異同はあれど、然るに其筮法はも、四十九策を以て其法の如く行ふに、過不及の數出來て、眞筮を得がたき物なり、其は此筮法に従事せる人ながら、眞勢達富と云る人の說に、夫著を撰へて得る所の策、四を奇とし八を偶とす、然るに四十九策にては、初變に左手の策を撰へて一を得れば、必ず右の策より三を得て、掛一の策と三合して、五策の奇數と成る、これ奇數を得依りの一なり、今云挂一の策とは、かの偽文の掛一以象三と有るに、或は二を得れば、必ず右の策より二を得て、掛一の策と三合して五策の奇と成る、これ奇數を得、或は三を得れば、必ず右の策